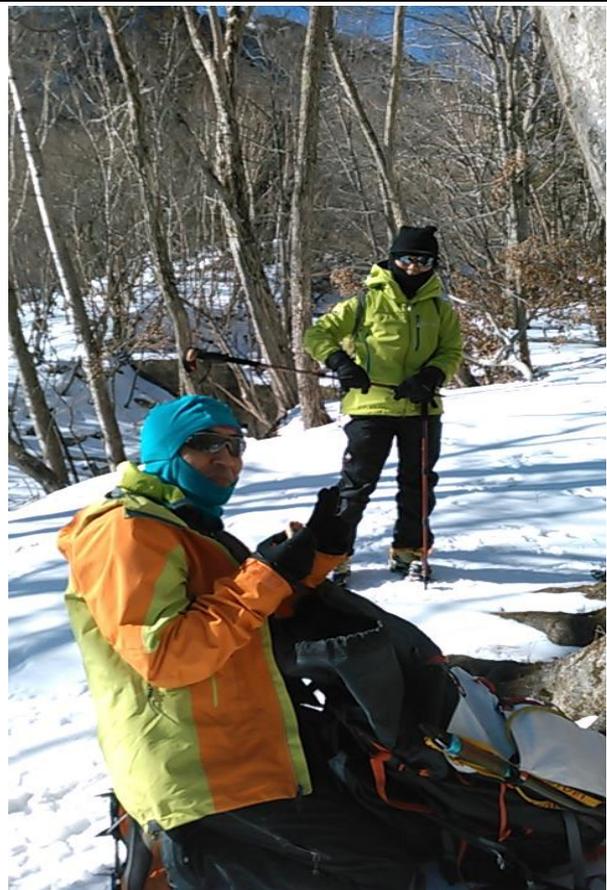


山 行 報 告 書

山行報告者：加藤

山 域・山 名：中禅寺湖畔ハイクと社山（1826m）		栃木県日光市
入山日又は期間：平成31年2月16日（土）～17日（日）（1泊2日）		
プラン担当者 正：今田		
参 加 者	L： 今田 山崎・加藤 男1名 女2名、計3名	
天候 快晴		
2月16日 （土）	集合時間： 午前6時半 集合場所：上尾駅東口セブンイレブン前 6:30 上尾駅出発～9:30 二荒山神社駐車場着 参拝 10:30 歌が浜駐車場着、出発～12:00 阿世湯着、テント設営後湖畔散策～15:00 テント場に帰還、夕食、就寝	
2月17日 （日）	4:00 起床、各自朝食～5:30 テン場出発、社山登山開始～6:10 阿世湯峠通過～ 7:50 社山山頂着、バリエーションルートを下山～10:00 阿世湯テン場帰還、 テント撤収、テープスリングの作り方実技～11:00 テン場出発～12:00 歌が浜駐車場着～15:00 頃さいたま新都心駅にて解散	
装 備 と 食 糧	共同装備：ツエルト（加藤）、スコップ（今田）、会5テンと個人用（今田）、 外張り（加藤）、ポール（山崎）、ガソリンバーナー・大コッフェル・ロープ （今田）、ガスバーナー（加藤）、16日夕食3人分（山崎） 共同食：山崎 車提供者：今田 次ページへ続く	

	<p>個人装備：シュラフ、シュラフカバー、マット、銀マット、ヘッドランプ、雨具、防寒衣、ピッケル、アイゼン、手袋、テルモス、新聞紙、ごみ袋、目出帽、ゴーグル、ハーネス（テープスリング代用可）、シュリング、環付カラビナ2枚、ストック、ワカン（スノーシュー）、コッフェル、バーナー、カラトリー、地図、コンパス、ナイフ、ラジオ、テントシューズ、アタックザック</p> <p>個人食：16日昼食、17日朝食 昼食 つまみ 行動食 非常食 つまみ お酒</p> <p>共同食：16日夕食</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">感想と注意事項</p>	<p>2日間を通じて、快晴と静寂と冒険に満ち満ちた山行だった。</p> <p>初日、歌が浜駐車場から阿世湯側の湖畔は積雪はあっても20cmほどで、テント設営後、状況に応じてアイゼンを着脱しながらの湖畔探検となる。風が強く、湖面に幾重にも寄せる細かい霰の向こうに、重量感のある男体山が腰を据えていた。探検は中禅寺湖周遊歩道の柵に収まりきることなく、道なき道を斜面を藪をものともせずに行われた。</p> <p>足元の危険な場面では、間髪入れずリーダーのザックから補助ロープが取り出された。5mかそこらの急斜面でも、補助ロープ一つあるだけでいかに快適に安全に通過できるか、アイテム一つで山行の質が決定的に分かれる事を身をもって体験した。</p> <p>早めの夕食を終え、それぞれのテントで就寝。山から吹き降ろす強風が、湖面を渡って対岸の二つのテントに一晩中体当たりしてきて、テントは紙風船のようにひしゃげたり引っ張られたり。それに加えて雪山テント初の筆者は、銀マットの上に夏用マット一枚敷いたきりで、地面の冷たさで背中がじんじん痛いなの…。冷え切った鉄板の上にくら極上の羽毛布団かけて寝たところでとても寝られたものではないことを、これも身をもって体験した。</p> <p>翌朝は、ボロボロと星がこぼれ落ちてきそうな星空の元、社山山頂目指してテン場を出発。凍った雪をザクザク踏みしめながら快調にペースを維持していくうちに、間もなく遠くの山並みの端が熱を持ったように明るみ始め、明けの明星を残して空が青さを増した。いきなり閃光が目差し込んできた次の瞬間にはもう世界が入れ替わっていた。</p> <p>稜線は強風が吹き荒れ、まっすぐに歩くのが難しいほどだった。山頂を過ぎ、いよいよバリエーションルートでの下山開始。尾根に乗るまでやはり道なき道をラッセルして進み、樹林帯の通過の際は、枝や岩を回避するのに気をとられていると腿の付け根まで片足が埋まったりした。</p> <p>足を引き抜き、行く手を阻む枯れ枝にエルボーをくらわし、何とか尾根に取り付く。そこから再び道なき道をラッセルして下る。積雪は50cm～1m位、雪は表面が固く締まり、バリバリ踏み割って時々腰まで埋まるのを黙々と体勢を立て直しながら、風の勢いのおさまったゆるやかな谷間を進んでいった。</p> <p>振り上げば、抜けるような真っ青な空に、白樺やブナの白い繊細な枝がレースのように広がっていた。うさぎやシカやたぬきやもしかしたら狐か何かの足跡が、そこいらじゅうに刻印された銀世界に、マタギのごとく、私たち3人だけがいた。</p> <p>黙然と前進し、そして休憩のたびに冗談を言っはケラケラ笑った。</p> <p>やがて湖が見え、湖畔の道に出てそのうちテントが見えてくると、一抹の寂しさが沸き上がってきた。冒険は終わってしまったが、この二日間の体を張った体験は、忘れられない貴重な財産となった。</p> <p>リーダーの今田さん、山崎さん、そして一部始終を見下ろしておられたであろう男体山の山の神様、ありがとうございました。以上</p>